

一日は、朝陽と Each Day Begins 共に始まり、 with the Sunrising 夕陽と共に and Ends 終わる with the Sunsetting

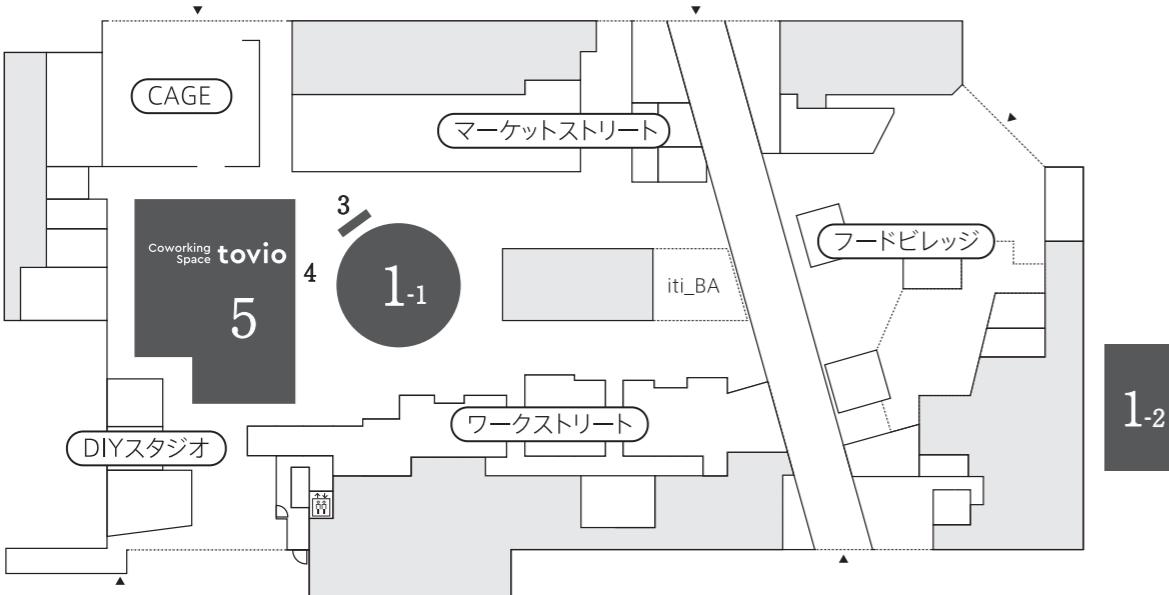
2023年4月29日(土)——8月6日(日)

10:00 — 21:00 入場無料 (コワーキングスペース tovio内の展示のみ観覧料550円)

主催 | Setouchi L-Art Project (SLAP)

協力 | 株式会社かこ川商店、株式会社南瓦工房、篠原テキスタイル株式会社、HAGW (Hiroshima Art Gallery Week)、福山電業株式会社

全体図



SLAP it Project vol.2
アーティスト招聘プロジェクト

吹き抜け空間

1. 《一日は、朝陽と共に始まり、夕陽と共に終わる》

2023

サイズ可変

日用不用品、電化製品、電球、ソーラーパネル

この作品は、日用不用品と太陽光によるインスタレーション作品です。様々な日用品は、主に福山地域の人々から提供され、譲り受けた品々です。個人の記憶の断片は集積し、町の輪郭を形成し、土地（地形・歴史・文化）のジオラマとなって色鮮やかに立ち現れます。それは、現代社会の消費と生産のサイクルをも反映しています。

電化製品は、独自のシステムからバッテリーを使用せず、その日その時に太陽が作り出すことのできるエネルギーのみを反映し、雨曇りでは光は明滅し、夕方には一日を終え、太陽と共にあった古来の人の暮らしのように稼働します。

2011年の福島第一原子力発電所事故は、原子力発電所と核爆弾との同一性を明らかにしました。また、現代的な生活を送る私たちの日常は、多くの電化製品に囲まれていますが、便利な日常とその事故との繋がりも明らかになりました。

本作品は、福田氏が広島で、核の否定という平和教育を受けてきたにも関わらず、豊かで便利な暮らしを送る中で、原子力発電所のさらなる増設を無自覚に助長していることを実感した体験に起因しています。

福
田
恵
Megumi Fukuda

1-2. 《ソーラーパネル》

2023

34.5 × 14 × 12.5, 34 × 13 × 12.5 cm

日用不用品、電化製品、電球、ソーラーパネル

提供：南瓦工房

屋外に設置されたソーラーパネルは、電力会社から送られる電力網ではなく、オフグリッドシステムの電力を必要とする本作品の主要なパートを担っています。会期中、太陽の軌道も変化しつつ、都市部ならではの周辺の建造物による日照の影響も受けながら、本作品は様々なレイヤーの環境を反映して稼働します。

今回の展示において、本ソーラーパネルは、2018年6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心に発生した集中豪雨で水没し、取換えられたものが利用されています。日本では、このようにまだ十分に稼働するソーラーパネルであっても廃棄処分されたり、再利用される機会が少ないと言った事情も反映しています。

3. 《記録映像作品の制作プロジェクト vol.1》

2023

17分44秒・ループ再生

期間中にワーク・イン・プログレスで変化する本プログラムは、制作過程のドキュメント映像、およびインタビュー映像の制作を行っています。本映像はvol.1として、展覧会開始前の記録、及びこれまでの展示記録で構成されています。

インタビュー収録は河村恵理氏（アートマネジメント）によって監修され、撮影・編集にあたっては、福永敦氏（映像制作、現代美術作家）の協力に基づきます。

4. 《リヒトミューレについての覚書》

2023

大 54.3 × 39.3 cm、小 21 × 29.7 cm

紙に鉛筆、和紙にインクジェットプリント

リヒトミューレとは、太陽光が当たると真空になっているガラスの中の羽が回転する装置です。福田氏が2012年、本プロジェクトを最初に行ったザルツウエーデル（ドイツ）の古物屋で見つけて以来、その太陽の存在を可視化する様子から、本プロジェクトを象徴するものとして、作家のアトリエに大切に飾られてきました。

光エネルギーを運動エネルギーに変換するリヒトミューレを巡り描写されたこのテキストは、いわば本プロジェクトのステートメントとも言えるものです。

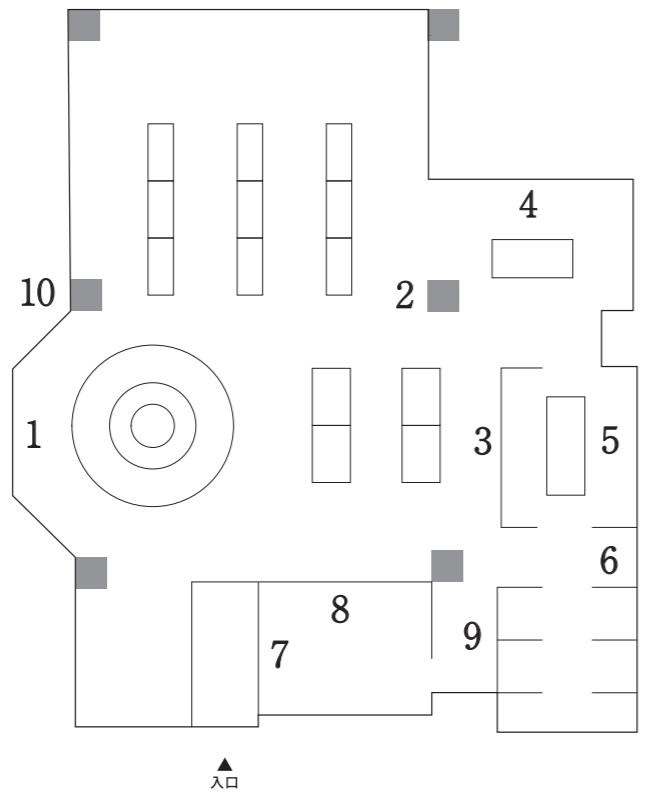
文字は黒い紙に鉛筆（グラファイト：白熱電球のフィラメントを連想するものとして）で描かれているため、一見判別しにくいですが、光を捉えることで識別可能となり、光という存在の認識を促します。

文章はハンドアウトに添えていますので、ぜひお持ち帰りください。

5. コワーキングスペース tovio 作展示品（裏面へ）

【展示作品にはお手を触れないようお願いいたします。】

コワーキングスペース tovio 展示



1.《リヒトミューレについての覚書》
2023

大 54.3 × 39.3 cm、小 21 × 29.7 cm
紙に鉛筆、和紙にインクジェットプリント

2.永遠の庭《祖父母の肖像として、広島》
2003 - 2004

各 約 9 × 13 cm
写真によるアーカイブ

「永遠の庭」は、写真による場所や記憶のアーカイブです。

植物技師を生業としていた福田氏の祖父は、植物栽培や品種改良の指導を行い広島県内を転々としました。福田氏の祖父が撮影した写真には、ようやく構えた終の住処、自然農法による田畠、季節の庭、自慢の菊栽培、大切に育てる果樹などの田園風景が残っています。

福田氏は、祖父の死から 10 年後、荒廃の進む庭に造花を植えました。とても良く擬態している造花は、根を張ることもなければ土に埋ることもできません。まるで、自然物が他の何者かによって急速に置き換えられている私たちの時代のリアリティーを強烈に象徴しているかのようです。四季を通じて常に変化する庭と、変わらない造花がどのように同居しうるのか。あるいは不可能か。

1年間を通して、庭の様子を観察しながら写真で撮られた記録です。

3.永遠の庭《よそ者として、ベルリン》

2006 - 2007
2006 年 6 月 27 日 Torstraße と Friedrichstraße の交差点 (06/31)
2007 年 3 月 18 日 Alexanderplatz (25/31)
各 105 × 140 cm
インクジェットプリント

「永遠の庭」は、写真による場所や記憶のアーカイブです。

福田氏は移住先のベルリンで、新天地との関係を築く一つの方法として、造花を植えながら都市の空き地を巡りました。当時、急激な都市開発が進む中、戦争と東西統合の歴史に関係し、ドイツの首都ベルリンにはまだ多くの空き地がありました。変容し消滅する空き地を、塗り替えられていく記憶や歴史と重ね、1年間、めまぐるしく変わる都市風景を観察しながら写真で記録しました。また、街を様々な方法で調べること、大量の造花を持って移動し、街に介入するパフォーマティヴな行為は、透明な福田氏自身を可視化し、ことどう関係できるのかを探る行為でもありました。

4.《チョップドローイング》

2023

各 32.4 × 43.2 cm
紙に版画、額

道具類の表面に残る、それが使われたときに付いた使用痕には、持ち主の意識化されない類の日常生活や習慣、身体的な動きや態度など、物と人との関係が刻まれています。

福田氏は、使用済みのまな板に残る包丁の痕跡を無意識／無意図的なドローイングと見て、その傷痕を写し取ることを通じ、物に内在する情緒的な記憶、あるいは物と人との関係の可視化を試みています。

5.《産前・産後記録：記録Ⅱ 浮遊する果実》

2018

ピグメントプリント、額
(42 枚セットの中から 18 枚)

本作は、福田氏の近所の有機農家や父母の家庭菜園、野山など、福田氏の生活圏内で収穫され、流通という枠組みの外側に存在する様々な生命体を撮影したものです。彼らは「規格外」の存在ですが、そのことが却って、スーパーで等しく揃った数多の果実達も実はそれぞれが唯一的な個体である、ということを表明しているかのように感じられます。

今回は、42 枚セットの中から一部を抜粋して出品されています。福田氏の通院期間中に折々で直面する生命の選別という難しい課題から着想し、イメージや枚数が決定されています。

6.《産前・産後記録：記録Ⅲ 授乳夜想曲》

2018

サイズ可変
音 (12 分 32 秒・ループ再生)、ヘッドフォン、楽譜など

福田氏の育児日記から、子供のケアに関する時間記録を音符に置き換え、楽譜を作り、それを演奏するという作品です。産後鬱の初期症状と診断されたことから、育児という労働と創造的行為を結ぼうと試みたものです。

2・3 時間毎に数ヶ月間繰り返される授乳時間（本作では夜間のみ）、現在法律で定められている産後休業期間の 8 週間(56 日)で構成し、ピアノで演奏されています。

机上には、基になった福田氏の育児記録と、授乳以外に排泄や出来事など様々な育児記録に基づいた奏鳴曲の楽譜（※現在制作中）が添えられています。

7.《クリンゴン式茶会用茶器》

2018

34.5 × 14 × 12.5, 34 × 13 × 12.5 cm
陶器

クリンゴン式茶会というのは、2 人の異星人が出てくるスタートレックシリーズのワンシーンで、クリンゴン星人と地球人が、一方には崇高な文化が、他方には毒であるという設定で描かれています。それでも 2 人は一杯の茶を、解毒剤を投棄しても飲み共有するという、文化や思想、戦争、生死を超えた固い友情が描かれています。

本作は、そのシーンのための茶器として、開口部が 2 つあり、頭の中でかき回された茶（思想・思考）を他者と共有する儀式のための茶碗として制作されました。

8.《クリンゴン式茶会用茶器のためのドローイング》

2018

各 36.5 × 44.5 cm
紙に水彩、塩、マット、額

壁面に添えられたドローイングは、茶碗を制作する過程で描かれたイメージドローイングです。

9.《HAGW2023 のためのクリンゴン式茶会用掛絵 2》

2022

各 21mm × 29.7cm
紙に水彩、海塩（広島湾）

2 つの顔がある人は、裏表や内外、男女や愛憎といった二面性、あるいは両義性を示しつつ、1 つの頭部を共有しているということによって、それらが同化もするし相反もする様子が描かれています。

これらは 1 枚ずつ個別の A4 サイズのドローイングですが、10 枚を順に並べると人々の繋がりができます。また、円状に並べると輪状にも繋がるようになっています。

独立しつつも顔を向かい立たせている、HAGW (Hiroshima Art Galleries Week 2023) をイメージして描かれています。

※HAGW とは、SLAP も含めた広島県内 12箇所のギャラリーが連携し、2023 年 4月末から 5月初頭にかけて初めて開催されるギャラリーウィークです。

